

平成27年2月4日(水)

老球の細道111号

NO1を目指す

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

2009年歴史的な政権交代が起こった。その年の流行語にもなったのが「仕分け」。当時の文部科学省予算仕分けの際、当時の必殺仕分け人、蓮舫議員が次世代スーパーコンピュータ開発の予算削減をした。この時に要求予算の妥当性についての説明を求めた発言である「世界一になる理由は何かあるんでしょうか？2位じゃだめなんじゃないですか」が話題になった。それに対して、ノーベル物理学賞受賞者の利根川進博士は「世界一である必要がないと語った人がいるが、1位を目指さなければ2位、3位にもなれない」と反発したことは記憶にも新しい。

同じ女性でも一番でなければだめだという人もいる。福島県出身の女性登山家、田部井 淳子さん(71歳)である。彼女が世界最高峰のエベレストに登頂したのが1975年。その時から一番にこだわり、世界各国の最高峰に登り続けている。これまで58カ国の最高峰に立った。そして、4年前にはアフリカのアルジェリアで最高峰にチャレンジした。

彼女はなぜ、各国のてっぺんを目指すのか？それは最高峰がその国のシンボルであり、尊敬を集める場所だから。最高峰を目指す過程で多くの人の出会い、その土地の伝統や食文化に触れ、たくさんのお話を教えられることができる。てっぺんを目指す過程にこそ楽しみがあると語る。てっぺんに立つために体力や技術はもちろん必要だが、一番大事なのは「本当にてっぺんに立つぞ！」という強い思いだそうだ。

山頂に立てば、眼下に広い世界が見え、自分の知らなかった光景を目の当たりにできる。そして、今まで見えなかったもっと高い山が遠い向こうにまだあることに気づく。アスリートの世界でも同じ。日本一になれば世界が見えてくる。自分よりももっと凄いアスリートが世界にはごまんといふことを教えられる。上には上がいる。いかに自分の存在がちっぽけか、謙虚な気持ちにさせられる。2番、3番では国内の相手しかわからない。自ずと見える世界は狭くなる。てっぺん、一番というのは、登山家にもアスリートにも新たな自信と可能性をもたらしてくれる。

ところで、わが会津地区にはどれだけ、福島県で一番、日本で一番、世界で一番のものがあるのだろうか。何事も二番、三番、それ以下で良しとする風潮は、文武両道を伝統とする会津地区にふさわしくはない。

NBAシカゴブルズの若きエース、デリック・ローズは「NO1になろうとする気持ちが萎えたらNBAを引退する」とインタビューで語っている。過去にNBAドラフト1位指名、NBA最優秀選手賞(MVP)、トルコ、スペインでの世界選手権優勝メンバーとしてNO1を獲得。今シーズンもケガから復帰して再度NBA最優秀選手賞(MVP)獲得、そしてチームの優勝に向けて目下ばく進中。

今現在、すべてにおいて普通であるチーム、選手に必要なのは、このような激しい上昇志向、そしてそれを実現させようとする炎のような努力なのではないだろうか。現在の実力が二、三流でも、目指すは一番、超一流を目指して努力を続けて行きたいものである。たとえ一番になれなくとも、それに至る努力の過程は必ずや至福の時間を与えてくれるだろう。いつも最高の自分で生きることができるのだから。